

神奈川県子どもとメディアとの関わりを考える地域づくり推進事業
災害時にも役立つ親子のためのメディア活用講座（活動記録）

日 時：2011 年 11 月 17 日（木）10：00～12：00

場 所：西区福祉活動拠点フクシア 多目的室

参加者：19 名

はじめに

NPO 法人シャーロックホームズ事務局長の東恵子より同法人の概要について簡単な説明があった。

講座導入部 “Sauve qui peut ”：情報の海は「てんでんこ」で進め

講師：NPO 法人シャーロックホームズ理事 宮島真希子

「子どもとメディア」と「防災」との接点について、下記のとおり説明があった。
一津波史研究者の山下文男氏の言葉で「てんでんこ＝てんでばらばらに」という言葉がある。津波のときだけは、「てんでばらばら、親子といえども人を頼りにせず、走れる子どもは一目散で逃げろ、そして一家全滅・共倒れになることを防げ」という三陸地方の知恵である。つまり災害時には、他人の指示を待つことなく、自分自身の判断力と行動で自分の命を守れということである。
私たちが生きる世界は情報の海である。情報の海の中で生き延びるには一人ひとりが考え・判断することが大事である。講座で扱うアナログな「地図」もデジタルなソーシャルメディアと同じく「情報手段」の一つである。専門家が地図をどう読み込み・活かすのかをワークショップを通じて体験してほしい。中にはネガティブで受け入れたくないような情報があるかもしれないが、そこから何ができるのか参加者自身が積極的な姿勢をもって考えてほしい。

“Sauve qui peut ”とは、フランス語で「生きられる者は生き延びよ」という意味で、船が難破したり、前線が崩壊したりした時に、船長や指揮官が最後に宣言する言葉である。一見厳しい言葉に思えるが、親はいつでも子と一緒にいることができるわけではない。日頃からアンテナをはり、家族で話合っしてほしい。親子がバラバラになった非常時（それは文字通りの災害時にしろ、情報の海で遭難した時にしろ）に親も子も生きのびられるように「てんでんこ」と“Sauve qui peut ”の精神を持とう。一

PART 1 ワークショップ 「知らないから怖いんだ、ちょっとずつできること備えてみよう」

講師：総務省消防庁防災図上訓練指導員・防災ファシリテータ 鈴木光さん

第1部：地震はいつでもどこでも

日本はどこで地震が起きてもおかしくない国であることを地震マップで確認。参加者に「子どもと外出中に地震がおきたら？」など具体的に災害を想定してもらいながら、地図を使った『災害イメージトレーニングゲーム』を行った。

グループに分かれ、横浜市西区周辺地図をつなぎ合わせ、ビニールシートを覆い、海岸線や離島などをなぞってゲーム開始。



グループごとに自己紹介をしながら地図上で自分が誰とどこにいるかを発表。そして震度6の地震が起きたらどのような状況になるか、またどのようなことが想定されるかなど意見交換をした。3月11日の地方太平洋沖地震での都内での状況（帰宅困難・携帯不通・停電など）の振り返りもした。



第2部：どうして危険なの？

では危険な場所はどうして危ないのか、過去にヒントがあるかもしれない・・・と配られたのが横浜市西区周辺の大正10年の古地図。第1部のように地図をつなぎ合わせ、ビニールシートの下に入れると、会場にはどよめきや思わず立ち上がる参加者もいた。「こんなに海岸線がずれている！」「わー！すごい」「海の上にビル」「斜面や山地に民家が」・・・驚きの声があちこちで飛び交った。続いてハザードマップ各種（液状ハザードマップ・洪水ハザードマップ・土砂災害ハザードマップ）がテーブルごとに配布され、それぞれを見比べながら更に災害のイメージを膨らませた。

『災害イメージトレーニングゲーム』のまとめとして、グループごとに意見交換とその発表があった。グループ発表より抜粋：

- ・ 古い地図が参考になった
- ・ 家にいた時だけではなく、外出中の災害のイメージができた
- ・ 犬との災害について考えてみたい
- ・ 日常生活で災害時のことを考えてみたことはないが、これをきっかけに考えたい
- ・ 家族がバラバラの時にそれぞれが理解して生き延びたい
- ・ ハザードマップをみたら、思った以上に怖いところに住んでいた。だけど落ち込むだけでなく日ごろから何ができるか考えることが大事だと思った。

第3部：ふりかえり



最後に鈴木さんは「正しく恐れて、正しく備える。日ごろの災害時のイメージトレーニングは訓練にもなる。今日講座で考え・イメージしたことが第一歩だとしたら、その次のステップとして帰ったらぜひ家族で話し合い、特に無防備になりがちな寝室の落下物の固定や移動など、簡単なことから始めてほしい。お土産も参考に！」というお話しでワークショップが終了した。

ワークショップのお土産

すぐにできる防災のお助けとして以下の2点を配布。

1. 備えるヒント集（災害用伝言ダイヤル117の体験利用法など、自分で調べるときのヒントが記載）
2. わたしの防災カシート（男女共同参画センター横浜北提供、下記参照）

PART 2 メディアのミニレクチャー

講師：NPO 法人シャーロックホームズ理事 宮島真希子

3月11日の東北地方太平洋沖地震の災害時に有効だった Twitter や Facebook などのソーシャルメディアの活用法について下記のとおり紹介があった。

— 3月11日の災害時あらゆる情報手段が不通になった中、緊迫感のある現場の被害をリアルタイムで伝えたのは Twitter であった。また都内での停電や電車の運行状況も Twitter で随時確認できた。その渦中にデマやチェーンメール的な使われ方をしたのも事実であるが、その訂正力も早かった。こういう情報手段を上手に活用すれば、より良い情報をより多くの人に広めていくことが可能になる「倍倍ゲーム」ができる。

また家族間で災害時に安否確認をするためにもいくつかの情報網を持っていると便利であるので、情報手段とその活用法を知って共有してほしい。

冒頭でも話したとおり、イザという時に情報の海に流されないためにも「常にアンテナをたて・自ら情報を取りにいくこと・そして使い慣れておく」といった、日ごろのからの備えが大事である。—



「わたしの防災カシート」について

男女共同参画センター横浜北 事務局長常光明子さんより『わたしの防災カシート』についてコメントをいただいた。「新潟県中越地震がきっかけで作ったもの。その時の被災者の女性たちの経験に学んで作られていますので、防災力をあげるために活用していただければ幸いです。」

<http://www.women.city.yokohama.jp/bousai/>

アンケート記入

参加者19名中、17名回答。

満足している（13名）、どちらかといえば満足している（4名）とおおむね満足していただいた。

アンケートより一部抜粋：

満足している理由

- ・ 普段考えるべき事なのに実行できなかった事なのでそのきっかけになりとてもよかったです。
- ・ 地図を用いた具体的な地震・災害の想像ができました。ツイッターの使い方なども日常使っていたほうがよいということにやはりとの思いです。
- ・ 「自分がどうなるか？」とそうぞうしてみる機会（本当はやりたくないコト、さけてるコト）、あえて皆でいる時にやれば怖くないですね。
- ・ 防災について再確認できた。「てんでばらばらに各一人一人が生きのびる」生きる力が沸いた。

防災ワークショップで印象に残ったことは何ですか？

- ・ 新旧地図を使って今を考えることができたこと。
- ・ 実際に地図を見たり、行動したりで、ただお話を聞くだけよりも楽しかった。
- ・ 「想像すること」大切だと思いました。
- ・ ハザードマップみて色々とイメージができた。
- ・ 地図から災害にそなえる情報が得られる。

ソーシャルメディアのレクチャーで印象に残ったことは何ですか？

- ・ やってみたいフェイスブックやツイッターが身近になった気がします。
- ・ 171なら自分でもできそう。練習してみます。
- ・ 家族でアカウントをとろう。
- ・ 自分に必要なものか・・・わからない。

帰ってから、どんな行動をしようと思いますか？

- ・ 家族であらためて災害について話し合いたいと思います。
- ・ 防災シートを作る。
- ・ 寝室の安全対策。
- ・ 家族で話し合い。

Twitter 登録会

2名参加。

NPO 法人シャーロックホームズ理事宮島真希子より説明。